

# 心理学の番外編 2008

～T 教授の観察ノートから～

2009.3.15 タツノオトシゴ



何処までが現実で、何処からが夢の世界なのだろう？  
此処に集まった研究生や、居合わせた客人たちが訝っている。

S 婦人の「意味深な笑み」を見た C.G.ユング少年は、ある共通点に気付いていました。たぶん、此処にいる人たちは仲間を求め、自分自身を探している人達なのだ…  
そうすると、T 教授が人里から離れたこの場を選んだ本当の理由も説明がつくのです。集まっているメンバーも 20 代から 30 代が多く、T 教授も声からすると外見よりは大方若そうです。自分の母親の年齢から判断していた事が、実は大きな間違いでした。(^^；  
この場所は選びぬかれた『実験場』であり、研究生は『モルモット』だったのだ！！  
そして、T 教授の本当のアシスタントは、由佳さんではなく S 婦人なのです。

Tomy Jr.は、まだティーカップを見つめたままで、何かを思い出そうとしているようです。すると突然、「魂と肉体の分離か～ァ！」と叫び、「魂だけが分離して、別の次元の世界を感じることが出来るなら、過去や未来の夢も見れるのかも…」と自問自答しています。すると S 婦人が、「そうかもしれないわね」と頷き、「Tomy さんは、大切な方を亡くされた経験をお持ちなのでしょうね？」と寂しげに呟き、サマンサの方を振り返りました。

「外も肌寒くなってきましたので、そろそろお部屋に戻りませんか？」S 婦人に促され T 教授も重い腰を上げます。<rinsan>は流暢なドイツ語で、「今日は思わぬもてなしを頂き有難うございました。」と挨拶し、<shibasans>も<hidehiko>に何か耳打ちし、「又、皆さんに会える日を楽しみにしています。日本に来られる機会があれば、<hidehiko>さんから連絡してもらえばご案内させていただきます。」と言い、二人は礼儀正しく来た道を引き返して行くのでした。

T 教授のメモ：医学的な分析があれば、今までの研究で分かりにくい部分を別の角度から調べる事も出来そうだ。東洋的な考え方は、もう少し掘り下げて取組む必要があるが私には残された時間が少ない。C.G.ユング君やラウル君のような若者が、今後を引き継いでくれるだろう。



何時ものように、夕食の支度が出来るまでの時間、何人かのメンバーが寛いでいます。その中で、由佳さんだけは落ち着かずにソワソワしているのです。今までの観察記録を見直したり、予期せぬ指名に何から話そうかと戸惑っている様子です。観客席から見ていたつもりが、気がつけば舞台の真ん中に立っていた由佳さん。夢の内容を話すとき、その人はあたかも演劇の主人公になったように雄弁に語ります。周りのメンバーがサポートし、話し易い状況を作り出しその夢を解釈していくのです。『そうか、自分が役者に成りきればいいんだ！！』と開き直った由佳さん、まな板の上の鯉？それとも鯛？(^^;

「さあ、何処からでもいらっしやいッ！」

早いもので、研究室のメンバーがこの別荘で生活を共にして11日が過ぎました。明日の晩餐会を終えると、翌日からは又もとの生活が待っています。初日に感じた驚きが少しずつ薄れ、やっと違和感なく生活のリズムとなっている自分に気がつきます。これですんなりと、もとの生活に戻れるのでしょうか？他のメンバーも同様、少し不安そうに帰り支度を始めています。あたりの景色も夕暮れの薄明かりに墨絵の世界を作り出します。



<大犬のふぐり・花と実の写真>

夕食の時間が近づき、皆が居間にそぞろ集まってきます。

2階から<うさお>が下を覗き込んでいます。

うさお：「誰か、健さんを見かけなかった？」と尋ねています。

TICA：「さっき、外でラウル君と一緒にいるところを見たけれど…」と答えています。

ユング：「あとは、うさおさんと健さんだけですよ！」

S 婦人と T 教授も、何時ものように夢の話聞きに居間に集まってきました。

T 教授：「おや、まだ全員集まっていないようだが？」

S 婦人：「今日は由佳さんのお話が聞けるのを、とても楽しみにしているのよ(^^)」

「お食事の支度まで時間があるので、もう少し待ちましょう。」

そこへ、うさおさんと健さんが遅れてやってきました。

うさお：「健さんを探しに行って遅くなりました。すみません」

健さん：「私も、うさおさんが探してるって聞いたので・・・すみませんでした。」

二人は、チョッと気まずい雰囲気を感じて、一番奥の席に着きます。

S 婦人：「それでは、由佳さんお願いね、早速、貴女のお話を聞かせて欲しいわ！」



由佳さんが話し始めると、皆がまるで自分自身の事のように聞き入っています。夢の中で、『これは夢なのだろうか?』と感じた人が多くいるはずです。夢と現実の世界、何処までが夢で、何処からが現実なのか?

T 教授のメモにはこんな言葉が…

夢と現実とは、心の鏡、裏表の関係なのか?

自分の欲望や拒否の心が、ふとしたきっかけでよみがえる。

似たような環境で、同じ夢が何度も繰り返されることもある。

<HP 資料> 今回は、作曲家ラフマニノフとその治療にあたったダーリについて

ニコライ・ヴラディミロヴィチ・ダーリ (Николай Владимирович Даль / Nikolai Vladimirovich Dahl, 1860 年～1939 年) はロシアの医師で、1887 年にモスクワ大学を卒業した後モスクワ市内で開業医として働いていましたが、専門は神経学、精神医学、心理学であり、音楽にも優れた才能を発揮したアマチュアのヴィオラ奏者です。

ダーリは作曲家セルゲイ・ラフマニノフの治療を行ったことで知られています。ラフマニノフは交響曲第 1 番の作曲で酷評を受け、神経衰弱に陥り創作活動が続けられなくなりました。1900 年 1 月、ダーリは催眠療法と心理療法を用いて 3 ヶ月以上にわたる治療を開始したのです。ダーリの治療と家族の支えにより快復したラフマニノフは、後にピアノ協奏曲第 2 番を作曲し、ダーリに献呈しました。(この曲の初演時、何時までも鳴り止まない拍手を聴きながら楽屋でダーリは「あなたのピアノ協奏曲は・・・」とラフマニノフに話しかけたところラフマニノフは「いや、あなたのピアノ協奏曲です」と返したそうです) ラフマニノフは 1909 年にはピアノ協奏曲第 3 番を完成させています。

秋にはラフマニノフはアメリカ合衆国への演奏旅行を行い、その際はピアニストを務めています。この旅行はアメリカでの人気を高め、その後 1917 年のロシア革命を逃れた彼は 1918 年に合衆国に移住しました。移住先では自活するために演奏活動に多くの時間を費やす必要があったので、新しい作品は少なくなっています。アメリカではピアノ制作者のスタインウェイと親交を深め、幾度かピアノを贈呈されています。



1931 年にスイスのルツェルン湖畔に別荘 (セナール) を建て、ヨーロッパとアメリカ合衆国を行き来しながら演奏活動を続けたのです。「セナール(Senar)」は、セルゲイ (Sergei)、ナターリア (Natalia)、ラフマニノフ (Rachmaninov) の頭文字を取ったものです。このようにしてラフマニノフは各地を廻り、数多くの名曲を作り出したのです。

その中でも『パガニーニの主題による狂詩曲』は1934年に書かれ、没後数十年の流れの中で幾人もの手により編曲されたものも含め、日本はもとより世界的に度々TV コマーシャルやドラマ等で流されることから、衆人によく知られる有名な作品の1つになりました。この後、交響曲第3番、交響的舞曲（最後の完成された作品）などが作曲され、左手小指の関節痛に悩まされながらも、演奏活動は死の直前まで続けられたのです。ビバリーヒルズ（カリフォルニア州）で1943年に癌のため死去し、ニューヨーク市近郊のヴァルハラロシア人墓地に埋葬されました。

<参考資料：無意識の研究とフロイトとの交流>

「連想実験」の研究を通じて、フロイトとは独立に無意識の力動構造を見出したユングは、無意識の動力学構造を利用して、精神分裂病の治療が可能ではないかとの展望を抱きます。しかし、無意識の心理現象については未知の部分が多すぎ、ユングが学んだ正統的なドイツの精神医学には、無意識の研究は存在していませんでした。。

在野の心理療法家と呼ばれていた人たちのなかには、無意識の心理現象に詳しい者が多く、ジャネもまた、心理療法家として無意識の力動理論を唱えていたのです。当時においては、ウィーンのジークムント・フロイトが、無意識の心理学と心理療法理論において名声をあげつつあり、ユングはフロイトから多くのものを学ぶことができると考え、他方、連想実験の研究ですでに無意識の研究者としての地位を得ていたユングと親交を結ぶことは、フロイトにとっても非常に意味と価値あることでした。

こうしてユングはフロイトより精神分析を学び、フロイトの持っていた無意識についての豊富な知見を学ぶと共に、無意識の構造やその力動について、徹底的な議論を交わした。後にユングは『自伝』に記しているが、フロイトの無意識理解には限界があったのです。それはフロイトの弟子たち、追従者、共同研究者たちにも同様に言えます。ユングの主題であった、精神分裂病の力動を、フロイトの理論では解読できなかつたし、治療法の指針もまた提示できなかつたからなのです。

さて、次回も果てしない空想の世界へと続きます・・・

